

フランスにおける文化的景観保全と 協働の場づくり

田中 尚人¹・シリル マルラン²

¹ 熊本大学 熊本創生推進機構 准教授

² フランス国立 建築造園高等技術者養成専門学校ボルドー校 准教授

本研究の目的は、日仏両国の協働による文化的景観保全が地域の記憶継承に果たす役割を比較研究することである。そのため本稿では、フランスの二つの地域において、それぞれ「サントミリオンにおける風景と生業の継承の場」、「ピレネー地域における風景と災害文化の継承の場」について考察し、多様な主体の協働とその要因や共有された価値について分析した。文化的景観の保全は、歴史、自然環境、生活・生業の3側面から、持続可能で、市民、行政、アソシエーションの協働によってのみ継承されうる地域文化の継承とほぼ同一であり、文化的景観のOUV (Outstanding Universal Value) = 本質的価値を多様な主体で共感して保全していくことが重要となる。

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

日本、フランス、それぞれの国において、特に中山間地の地域社会では、気候変動や高齢社会、人口減少など、様々な経験したことのない変化が訪れている。これまで地域社会で共有していた文化が失われ、若者が都市に流出し、後継者不足などにより生活や生業が著しく不便になり、限界集落などと存在自体が危ぶまれるような地域も出始めた。日本では地方創生やふるさと回帰が叫ばれ、挑戦する地域、積極的なソーシャルイノベーションに取り組む地域が勝ち残る、といわれている。また、2000年に欧州ランドスケープ条約(ELC: European Landscape Convention)が発表されて以来、地域固有の暮らし、生活・生業を含んだ地域景観に注目が集まり、さらに近年では環境保全や経済的な地域発展なども合わせて議論されている。

21世紀に入り地方分権施策が目立つフランスでは、道路整備における「1%景観と発展」政策や土木遺産を核としたツーリズムなど、道路や運河などインフラ整備を通じて各地域の環境・景観整備、観光政策などが連動し始めている。これらに対して、日仏ともに地域住民、地方自治体ら多様な主体の「参加(Participation)」が必須とされている。日本では「河川愛護」や「川自慢」など、川や水路を活かした流域の地域アイデンティティを高める活動が目立ち、200を超えると言われる日本の水系・流域文化の多様性に根ざしたかわまちづくりの進展を感じさせる。私たちは、これまでこのような地方都市や中山間地において、

多様な主体の連携による文化的景観の保全が、地域アイデンティティの涵養に役立ち、コミュニティの持続的発展、地域の記憶の継承に結びつく可能性について研究してきた。

本研究の目的は、日仏両国の協働による文化的景観保全が地域の記憶継承に果たす役割を比較研究することである。本稿では、2018年9月に筆者らがフランスのサン＝テミリオンにて実施した「風景と生業」セミナー、同じくルルドにおいて実施した「風景と災害」セミナーについて、多様な主体の協働とその要因や共有された価値についてした。本研究は、独立行政法人日本学術振興会とCNRSとの二国間交流事業（セミナー）による支援を得て実施した。

(2) 研究の手法

日本側は、田中尚人（土木史・まちづくり）、星野裕司（土木デザイン・景観工学）、竹内裕希子（地理学・防災教育）と、同じ熊本大学に属しながらも専門性の違う3研究者が協力し、本セミナーを開催する。フランス側は、フランス国立建築造園高等技術者養成学校ボルドー校教授セルジュ＝ブリフォー（Serge BRIFFAUD）、同准教授シジル＝マルラン（Cyrille MARLIN）が共同研究者となる。両国の研究者は、研究に携わる一方、ランドスケープ・デザイン、景観計画策定や観光マネジメント、防災教育や人材育成など、地域づくりの実践に携わる技術者・実務家であり、それぞれの地域において文化的景観保全に関するアクションリサーチを行ってきた。

本研究では、公共空間デザイン、地域マネジメント、教育プログラムの開発を通して、文化的景観保全に関する様々な協働の「場」をデザインし、そこで得られた協働の実践知を、臨床的に分析する。気候変動、高齢社会、人口減少などの状況下において、条件不利地における地域の持続的発展につながる、地域アイデンティティの獲得、シビックプライドの涵養に資する場のデザインに必要な要件を明らかにする。シビックプライドとは、「市民が都市や地域に対して持つ愛着や誇り、自負」を指す。具体的には、各研究者が行うアクションリサーチにて得られた知見を、現場でしか得られないデータとして丁寧に記述し、セミナーで相互に発表し、ディスカッションを行う。両国間で相違点について、多様な観点から話し合うことにより研究が深まる、と考えている。

2. サンテミリオンにおける風景と生業の継承の場

(1) セミナーの概要

日時：2018年9月7日（金）

場所：シャトーラロック

開催都市：サンテミリオン（Saint-Émilien）

村全体が「Cultural landscape（文化的景観）」のエリアとして、ユネスコの世界文化遺産に登録されているサンテミリオンにおいて「風景とテロワール財団」の方々と、多様な主体との協働による文化的景観保全が、地域の人々の記憶の継承、シビックプライドの形成などについて与える影響についてセミナーを行った。

(2) 風景の保全と農業

車に乗って、ボルドーから約1時間でサンテミリオンに到着。シジル先生、セルジュ先生のコーディネート、井口尚美さんの通訳によりシャトーラロック (Château Laroque) (写真-1) にて、2018年6月に設立された「風景と風土財団 (Foundation “terroir et paysage”)」との意見交換会を行うことが主目的。筆者らは、以前 Cultural Landscape として初めてユネスコの世界文化遺産になったサンテミリオンの保全、持続可能な景観まちづくり、オルタナティブツーリズムの適用についても説明を受け、その保全活動に取り組んだセルジュ先生とともに、サンテミリオンの調査報告書、その取り組みの特徴について講演して頂いたことがある。サンテミリオンは、水が不足しがちな条件不利地でありながら、かつてイギリス人が入植しブドウを植え、13世紀に誕生した「ジュリディクション」という自治組織を基に、家族経営のワイン農家が、強い紐帯を保ちながらワインを作り続けた地域であり、地域固有の自然環境、歴史、生活・生業から成る文化的景観として申し分がない。そして、ユネスコ世界文化遺産になる際にも、前後10年間に渡って文化的景観の保存計画、まちづくりの実践などについて、モニタリング調査が行われた。

午前中は村のいくつかのシャトーやブドウ畑を見せて頂いた。サンテミリオンのシャトーは、全て家族経営の小さな規模であり、とある場所では、異なった考え方を持った3つのブドウ畑 (写真-2) を見る事ができた。右手は、環境に配慮したエコロジカルなワインづくりを行っておられるオーナーのブドウ畑。シャトーも環境に配慮した建材でできていました。左手は、中国系アメリカ人ながら、サンテミリオンの伝統的なワインづくりをしたいと参入されたオーナーのブドウ畑。わざわざ斜面に沿って、小さなクロ (ブドウ畑) を復元再整備しました。奥のオーナーは、機械化や先端技術を取り入れ、近代的なワインづくりをしたいそうで、シャトーも現代的な建物でした。サンテミリオンでは、まさに風景は暮らしを内包した文化的景観であり、生活の哲学、暮らしぶり、生業が滲み出していた。



写真-1 畑への眺望を重視したシャトーの庭園



写真-2 3つのオーナーのブドウ畑を視察

(3) 風景の保全と多様な文化の継承

お昼はサンテミリオンらしく「Château Laroque の赤 2005」と牡蠣（ボルドー近郊のアーカションにて水揚げされた地元産）を頂いた。熊本の牡蠣もアメリカなどに輸出され有名であることなどを説明し、熊本から持参した県産の日本酒三本を現地の方々に振る舞い(写真-3)ながら、熊本の文化的景観保全とこれら日本酒を醸造している老舗について田中がプレゼンテーションを行った。阿蘇の国選定重要文化的景観に関しては、高森町の山村酒造さんの「れいざん」を、国指定重要文化財の通潤橋と国選定重要文化的景観の「通潤用水と白糸台地の棚田景観」に関しては、通潤酒造さんの「雲雀」を、日本遺産に選定された菊池川流域からは和木町の花の香酒造さんの「桜花」を、そして緑川舟運の要衝地熊本市の川尻町からは瑞鷹さんの「菜々」をお持ちした。サンテミリオンの若手醸造家の皆さんは、日本酒に舌鼓を打ちながら、盛んに熊本の「水」の良さを褒めて下さり、風景とお酒や食の関係について語り合った。

カトリーヌ事務局長から、風景と風土財団の事業、運営方針などたくさんのごことを学んだが、財団として大切にしておられるのが、① Education, ② Innovation, ③ Transmission の3つの哲学である、とのことだった。サンテミリオンの子ども達と行ったワークショップでは、子ども達が描いた自分たちやサンテミリオンの風景を編集し、一枚の絵とするというコラージュを作成し、まさに「風景が学びの場」となっており、たいへん共感し、今後の交流を約束(写真-4)した。また「みんな違って、みんないい」、「曖昧さを受け入れることのできる社会をつくる」など、僕たちの活動とも共通する部分が多く、とても励まされた。



写真-3 熊本の日本酒を振る舞う



写真-4 事務局長と子ども達への仕事

会議後は、同じくサンテミリオンの Château Larcis Ducasse を見学させて頂き、若き醸造家から、管理を任されている1級の赤ワインをつくるブドウ畑を見学した。そのブドウ畑では、細かな等高線に沿って土地が造成され、日照や風の通り抜ける道、そしてクロ毎にどんなテロワール（土壌：Terroir）なのかが示され、地域の固有性を科学的に学び、それらを統合して伝統的なワインを創る姿勢に感銘を受けた。伝統のなかに、科学的に暮らしている姿に印象を受けた。

3. ピレネー地域における風景と災害文化の継承の場

(1) セミナーの概要

日時：2018年9月9日（月）

場所：PLVG：ガープ渓谷災害復旧事業ルルド事務所

開催都市：ルルド

元々雪崩頻発地域であり、2013年には豪雨災害もあったミディ＝ピレネー地方のガープ川沿いのリュス＝サン＝ソバルやバレージ災害復旧・復興の現場での課題について、熊本地震や九州北部豪雨災害からの復旧・復興との比較・検討などを行った。

(2) ピレネーの山の暮らし

9/8（土）車に乗り込み、約3時間かけて、フランスとスペインの国境に位置するピレネー（Pyrénées）へ移動。さっそく近くの小山に登り、博士論文をピレネーの山岳開発史でとったセルジュ先生から、フランス山の暮らしについて講義を受けた。中村良夫先生と2015年に訪れた際には、見上げただけのバレージ（Bareges）の山小屋（写真-5）を、上まで登って見てみると、「災害を受け流す」また新たな発見があった。阿蘇でもセルジュ先生が講演して下さった。



写真-5 雪崩常襲地域における山小屋の佇まい



写真-6 温泉場の復興と災害観光

翌9/9（日）は、ピレネー地域において風景と災害に関する現地調査を行った。スペインの国境にあるガバルニィ（Gavarnie）渓谷へ、ユネスコ世界複合遺産「ピレネー山脈のペルドゥ山」の一部であり、Grand Site かつ National Park でもある、この渓谷にはたくさんの観光客が押し寄せる。18世紀に始まった、巡礼、観光、牧羊、斜面崩壊を防ぐための治山、植林（forestring）、管理用道路づくり、公園化など、地域社会（コミュニヌ）と谷（バレイ）と国との複雑な関係を、美しい谷の風景の中でセルジュ先生から丁寧に教わる。昼御飯はスキー場の定食屋といった風情のステキなレストランで、La garbure complete を頂く。具沢山のスープが garbure、これに豚肉のジャンボンを入れて食べると complete となるそうだ。熊本の「だご汁」にも通じる、山の恵みを一滴残らず味わう。

午後は、隣の谷コットレット (Cauterets) へ。フランス近代砂防発祥の地であり、災害後に散策路を設け災害地を学びながら観光する「防災教育ツーリズム」の発祥地とも言える温泉場 La Raillère (写真-6) を見学した後、スペインとの国境まで歩いて行けるといいう Pont d'Espagne へ。午後は天候に恵まれず駆け足の見学となったが vallée 毎の文化の違いを感じた一日であった。

(3) ピレネーの都市部における水害マネジメント

9/10 (月) 宿泊地であったリュス＝サン＝ソヴァールからルルド (Rourdes) に車で45分ほど移動。10時～13時の間、ルルドにある PLVG (Pays de Lourdes et des Vallées des Gaves) にて「災害と風景」に関するセミナー (情報交換会) を行った。PLVG は、2013年6月18日にピレネーで起きた大水害からの復興を担当する現地事務所であり、熊本地震からの復興について、星野、田中、竹内が日本での取り組みを紹介した。PLVG の技術者の方は、熊大で実践している地域住民や被災者とともに取り組んでいる、公共空間づくり、防災教育、日常を取り戻すためのまちづくり、特に「記憶の継承」事業に興味をお持ち頂き、2013年の災害に関するアーカイブ資料などもご提供頂いた。

その後、ルルド市内で浸水対策を施したホテルの現場を訪れ支配人の方からお話を聞かせて頂いた (写真-7)。ルルドは、全世界から巡礼者が集まる聖母巡礼の地として有名であるにも関わらず、ピレネーの雪解けの水が洪水となり、度々中心市街地を襲っていた。HOTEL PARADIS はルルドの中心部にあり、2013年洪水災害では2m近い浸水被害を受けた。災害の10時間前に氾濫することが通知されていたが、建物への浸水を防止する対策が無く浸水被害が発生した経験から、ホテルの1階外構を改修し、コンクリートとガラスの防壁で建物を取り囲んだ。通常の出入り口は可動式の鋼材壁となっており、平常時は地下倉庫に収納されている。毎月1回2時間半かけて設置訓練が実施されている。この地域で水害が発生した際の浸水時間は10～12時間と想定されており、今後は事前に宿泊客を安全な他のホテルに避難させ、建物はこれらの防護壁で浸水被害を防ぐ予定である。これだけの備えをする背景には、宿泊客の安全を確保するだけでなく、ホテルが掛ける保険のグレードを維持することも目的としてあげておられた。



写真-7 浸水対策を施したホテルの社長



写真-8 温泉場の復興と災害観光

午後14時～17時は、さらに人数が増え、国の行政官や市役所の技術職員らと共に、ガープ渓谷の流路改修の現場を見学した。道路空間の再編成や新しい歩行空間の創出なども見られた（写真-8）が、記憶の継承、景観や環境に配慮した整備に関しては日本とフランスの復旧・復興に関する相違点が学べた

4. まとめ

本稿では、フランスの二つの地域において、それぞれ「サンテミリオンにおける風景と生業の継承の場」、「ピレネー地域における風景と災害文化の継承の場」について考察し、多様な主体の協働とその要因や共有された価値について分析した。

サンテミリオンにおいては、それぞれのブドウ畑からワインが製造される生業が、地域固有の風景を深く結びついており、ワインが地域のみならず、世界の食の文化を支え、子ども達のシビックプライド醸成にも深く関わっていることが分かった。

ピレネー地域においては、山の暮らしが現代にも息づき、様々な伝統が継承されている一方で、牧羊、治山・植林、ツーリズムという19世紀以来のコンフリクトが風景にも深く影響を及ぼし、近年の温暖化や異常気象によりもたらされる災害によって、風景が一変してしまう危険性を秘めている。

文化的景観の保全は、歴史、自然環境、生活・生業の3側面から、持続可能で、市民、行政、アソシエーションの協働によってのみ継承されうる地域文化の継承とほぼ同一であり、文化的景観のOUV（Outstanding Universal Value）＝本質的価値を多様な主体で共感して保全していくことが重要となる。

謝辞：

本研究には、様々な方々にご協力頂いた。熊本大学の星野裕司先生、竹内裕希子先生には共同研究者として多大な尽力を頂いた。また、サンテミリオンやピレネー地域の方々には、ヒアリング調査や意見徴収などにもご協力頂き、たいへん参考にさせていただきました。記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) ランドルフ・T・ヘスター著・土肥真人訳、エコロジカル・デモクラシー まちづくりと生態的多様性をつなぐデザイン、鹿島出版会、2018. 4.
- 2) 都市生活研究局（著）・伊藤香織・紫牟田伸子（監修）、シビックプライドー都市のコミュニケーションをデザインする、読売広告社、2008. 11.
- 3) 伊藤香織 + 紫牟田伸子（監修）・シビックプライド研究会（編著）、シビックプライド2【国内編】ー都市と市民のかかわりをデザインする、読売広告社、2015. 9.
- 4) 鯨岡峻、エピソード記述入門、東京大学出版会、2005. 8.

Study on “Ba” of collaboration for preservation of cultural landscape in France

Naoto TANAKA and Cyrille MALRIN

The final aim of this research is comparing the role of transmission of memories and experience in the local cultural landscape between France and Japan. So in this research, there are two case studies. One is the “Ba” for transmission of the connection between industry and landscape in Saint-Emillion, and the another is the “Ba” for transmission of the connection between disasters and landscape in Pyrenees. It is analyzed that collaboration by various stakeholders, its factors and values. Preservation of cultural landscape is the same as sustainable community development for transmission of local identity from three aspects, history, natural resources, lives and industries. It is important for local people to transmit the outstanding universal value of cultural landscape and sympathy for it.

(2019.1.30 受付)